


 書評

Muriel Laharie 著，濱中淑彦 監訳

中世の狂気

十一～十三世紀

酒井明夫

著者ラアリーはアナール学派の俊英ジャック・ル＝ゴフに学んだ歴史家である。まずは順序通りル＝ゴフの序文から目を通すと、いきなりこの書の重要な位置づけが目飛び込んでくる。ル＝ゴフによれば、『中世の狂気』はジャッキー・ピジョーの一連の著作とミシェル・フーコーの『狂気の歴史』の間を埋めるものなのである。

周知のようにフーコーの前掲書は 17, 18 世紀古典主義時代の狂気の諸相を提示し、その意味を考察した名著である。精神医学史を超えてこれが思想界全体に与えた影響は計り知れない。一方のピジョーは古代の狂気を独自の手法で読み解き、そこに詩的ともいえる深い洞察を加えた碩学である。ピジョーの視野には医書ばかりでなくおよそ古代世界の名だたる文献類がとらえられている。ピジョーとフーコーを両脇にした本書には、したがってきわめて高い評価が与えられていることになる。

本文へと読み進むうちに、こうした評価は全く正当なものであることが実感されてくる。なによりも本書は、狂気に対する中世的対処の錯綜ぶりをよく伝えている。たとえば宗教的な癒しと医学的治療の混在、狂人に対して示される寛容とその徹底した排斥、これらの主題を構成する実に多種多様な言説や道具、それらが余すところなく我々の前に並べられる。おそらく他の時代にも増して混沌の様を呈することこそが中世の特質であり、著者はその有様を生き生きと描き出している。

印象的な箇所を 1 つ紹介してみたい。それは俗語文献に描かれた 3 つの例に共通する治

療法である。最初に、神を忘れたペルスヴァルは 5 年の間内面の混乱と悲しみの生を送るが、5 人の騎士と 10 人の貴婦人、そして彼の伯父の隠行者との強い感情的交流を通じて神への愛を取り戻し、苦悩から解放される。そして、恋の絶望から狂気に陥った騎士イヴァンは、隠行者の努力と侍女の献身的な看病のおかげで正気に戻る。最後に若者アマダスは忠実な愛人イドワヌを失うという恐れから狂気にとらえられるが、そのイドワヌの必死の哀願が功を奏し、精神喪失と乱行から脱することができた。

精神分析的な解釈が織り交ぜられたこれらのエピソード記述には、封建時代の多種多様な治療法の 1 つが通底している。それは厳密に言えば宗教的、医学的いずれかのモデルだけでは説明できない治療である。著者は、上記 3 例をこう総括している。「神経症や狂乱型狂気に罹患した幾人かの主人公は…ほとんど愛のみによって治癒しているのである」。

監訳者が「訳者あとがき」で述べているように、本書の内容は「単なる中世医学史ではない」。そこには中世文化のさまざまな側面が描出されているが、それは多様な領域を横断する狂気という事象の本質とも関連しているだろう。中世世界のまっただ中に狂気を位置づけようとするラアリーの意図は見事に実現され、読者は中世を満喫することができる。『中世の狂気』は多くの読者に多くを提供する書である。

(岩手医科大学神経精神科学講座)

●A5 440 頁 2010 定価(本体 6,400 円+税)
人文書院